2021 年 12 月 20 日

留学報告書

南山大学長
ロバート・キサラ 殿

総合政策学部
教授　オコネル・ショーン

(1) 留学期間

2019 年 9 月 10 日～2021 年 3 月 9 日

(2) 受入機関（滞在地）

1. （公団）ラグビーワールドカップ 2019 組織委員会（日本国・東京都）
2. School of Educational Studies and Leadership, University of Canterbury
   (ニュージーランド国・クライストチャーチ市)

(3) 主な研究目的・活動

本留学の目的は主に 2 つの研究テーマに沿って、異文化理解とコミュニケーションに対する専門知識を深めることであった。

第一の研究テーマは「*THE IMPACT OF INTERNATIONAL SPORTING EVENTS ON INTERCULTURAL ENGAGEMENT IN JAPAN –国際スポーツイベントにおける異文化交流の影響に関する研究—*」で、2019 年 9 月から 11 月にかけて日本で開催された RUGBY WORLD CUP 2019 という国際スポーツイベントを研究対象にした。報告者は、この期間に試合の開催地を廻って、海外から来日する参加チーム（選手、コーチ及びチームスタッフ等）と地域（市民、会場、キャンプ地のスタッフ、地域ボランティア等）の人たちが 2 ヶ月間交流を持つことがいかに異文化理解向上に繋がるかを探りながら、外国人と現地の市民とのコミュニケィ形成にどの様な影響を及ぼすかを検証した。研究手法として、主に参与観察法（聞き取り調査及フィールドノート取り）を用い、特に地域ボランティアや関係者と海外代表チームとの交流に焦点を当てる研究となった。

第二の研究テーマは「*MULTICULTURAL SOCIETY FORMATION THROUGH COMMUNITY ENGAGEMENT–日本人とニュージーランド人のコミュニティ・エンゲージメントによる多文化共生社会形成に関する比較研究–*」であり、報告者は 2019 年 11 月から 2021 年 3 月にかけて、カンターベリー大学（Christchurch, New Zealand）を拠点とし、研究活動を行なった。復興事業の一環として University of Canterbury Community Engagement Research Hub を立ち上げ、CHCH 101 というサービス・ラーニング形式のコースを開発した Dr. Billy Osteen (School of Educational Studies and Leadership 学科所属)センター長の指導の下で、日本人学生を含む国内

外の学生が履修する CHCH101 に対する学びの実態や、学習目標として設定されている「クローバル・シティズンシップ」などの達成感等を検証した。加わって、クライストチャーチに滞在する長期在住の日本人を対象に、多文化共生社会の形成という観点から、いかにニュージーランド人や他国からの移民と協力しながら生活しているかについても研究した。

次に、上述したテーマ別に行なった活動を詳しく報告する。まず、第一テーマについては、2019 年 9 月から 11 月の上旬にかけて、ラグビーワールドカップに参加した海外代表チームと地域ボランティアや関係者との異文化交流を多く観察することができた。参与観察法（聞き取り調査及フィールドノート取り）を用いながら、海外からの参加者と開催側の関係者が異文化間コミュニケーションをとる中で、どのようなストラテジーが効果的なのかを明らかにする基盤研究になった。データからの発見の 1 つとして例を挙げると、外国でプレイする場合は、海外代表チームが常に求める「high-performance culture」（高い成績を追求する組織文化）を維持するには、チームメンバーの中に cultural link-pins （異文化理解の繋ぎ役）を置くことが欠かせないことがわかった。つまり、その役割を果たす人がいることによって、チームメンバー一人一人（選手・コーチ・スポートスタッフ）が果たすべき役割がきちんとできることが明らかになった。Cultural link-pin には、高い言語力と異文化対応力も求められる他、チーム・メンバーが現地の関係者・ホランティアとのコミュニケーションをとったり、交流をもったりするために、文化的な違いに対するアドバイザー役割を果たさないといけない場面が多いことも明らかになった。なお、ラグビーワールドカップ期間中に得られたデータを基盤研究とし、ニュージーランドに渡航した後も「high-performance culture」の構築がどう扱われているかについて、留学先のカンタベリー大学にあるスポーツ化学・コーチング学科の研究者と一緒にさらに調べることができた。

写真 1 ：RUGBY WORLD CUP 2019 CHANGING ROOMS　写真 2 ：地域参加イベント：SCOTLAND TEAM 小学校訪問の様子

次に、第二テーマの研究について報告する。当初の計画では、2019 年 11 月から 2021 年 3 月にかけて、カンターベリー大学にて国内外の学生が対象となる予定ではあったが、新型コロナウイルス感染拡大によって 2020 年 3 月中旬よりニュージーランドへの入国規制が厳しくなり、短期・長期留学生の履修がほぼゼロになってしまった。その結果、研究計画の微調整をすぐに行い、研究手法として、国外の学生については、過去のデータ分析やアンケート調査を元に研究することにした。それから国内学生については、アンケート調査の他に参与観察法も用いた。なお、2020 年度には「Creating a research-driven collaborative framework for global citizenship and international service-learning studies」という研究課題として、基盤研究 C の科研費を代表として獲得することができたことから、カンタベリー大学だけではなく、ニュージーランドにある他の大学でもサービス・ラーニングの現状と今後の発展について現地調査することもできた。この研究の中で、担当教員とニュージーランド人の学生だけではなく、現地で長期留学や定住している多国籍の学生も対象に加えることができた。そういった学生を対象にし、ボランティア活動を通じてニュージーランドにおける多文化共生社会の形成について意見や体験談も聞くことも、活動の一部を観察することもできた。この研究を通じて、カンタベリー大学が力を入れている「UC BICULTURAL COMPETENCE & CONFIDENCE FRAMEWORK」が非常に有用な枠組みであることが確認できた。

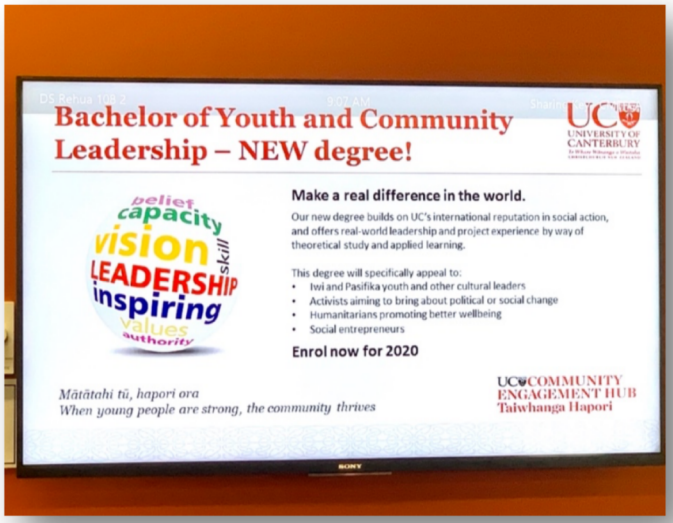

写真 3 ：UNIVERSITY OF CANTERBURY: COMMUNITY ENGAGEMENT に焦点を当てる学位

写真４：学びの一環として学外でも活躍する
ボランティア学生

写真５： カンタベリー大学 STUDENT VOLUNTEER
ARMY が常に活動している

もう１つ焦点を当てる対象として、日本人とニュージーランド人のコミュニティ・エンゲージメントによる多文化共生社会形成に関する比較研究を進めた。研究留学期間中には、合計８０人の日本人（15 年以上の長期滞在・定住者）を対象に、成功例と失敗例を含むニュージーランド人とのコミュニティ・エンゲージメントの経験などについてインタビュー調査をすることができた。この研究活動によって、ニュージーランド人と日本人の文化的な類似点と相違点が大いに明らかになり、多文化共生社会形成において譲り合う心を持つことを含む異文化対応力がいかに重要なのかがわかった。こういった研究活動をしていく中で、対象者はもちろんのこと、様々な研究者・教員との対話も大変貴重な機会となった。

(4) 研究成果

上述した研究活動と研究交流を通じて、膨大なデータを収集ことができた。以下、研究成果について報告する。

- **研究発表**
  - 個人発表:「Intercultural skills in high-performance environments: An analysis of international teams in the Rugby World Cup 2019」 University of Canterbury Faculty Workshop Series, College of Education, Health and Human Development, University of Canterbury, New Zealand (2020 年 03 月 10 日)
  - 個人発表:「Assessing High-Performance Cultural Intelligence: A Study of International Rugby Teams in the Rugby World Cup 2019」 University of Canterbury Faculty Workshop Series, College of Education, Health and Human Development, University of Canterbury, New Zealand (2020 年 12 月 15 日)
  - 基調講演:「Intercultural Strategies in High Performance Environments: Observations from the Rugby World Cup 2019」The 11th Asian Conference on Cultural Studies (ACCS2021). The International Academic Forum (IAFOR) (2021 年 6 月 03 日)

- **著作・論文執筆**
  - **（論文）**
    - 「Creating a Framework for Global Citizenship and International Service Learning Studies: An Experiential Education Approach 」，共著，2021 年 1 月，『アカデミア』人文•自然科学編，第 21 号，南山大学
    - 「Exploring the Effects of Service-Learning Student Voices from CHCH101」，共著，2021 年 6 月，『アカデミア』人文•自然科学編，第 22 号，南山大学
    - 「Assessing High-Performance Cultural Intelligence: A Study of International Rugby Teams in the Rugby World Cup 2019 」，　単著，2010 年 6 月，『アカデミア』文学・語学編，第 110 号，南山大学

  - **（著作）**
    - 『「なんとかなるだろう」文化対「もしかして駄目かもしれない」日本とニュージーランドの文化比較と解説』単著
      （原稿最終仕上げ中：2022 年春出版予定）

(5) 今後の計画

本留学中に収集・分析できたデータはもちろんのこと、他の研究者との対話、市民を対象にした調査の経験を通じて、研究執筆に取り組むと同時に、南山大学での授業展開を今後積極的に実施していきたい。分野としては、以下のように主に 3 つ考えられる。

（1） 多文化共生テーマ科目
（2） スポーツ界における通訳・異文対応力養成科目
（3） サービス・ラーニング科目

なお、2021 年 4 月より、南山大学ラグビー部の部長として着任した。上述した RUGBY WORLD CUP での研究成果及び人脈作りを本学のラグビー部の更なる発展にも活用できるようにして行きたい。以上が研究留学の報告になる。この期間中に収集できたデータや研究資料を引き続き分析しながら、さらに著作や論文として成果を公表していく。

最後になるが、南山大学に本研究留学の機会を与えていただけたことに心よりお礼を申し上げたい。